

ラーニング・コモنزの可能性： 魅力ある学習空間へのお茶の水女子大学のチャレンジ

茂出木 理 子*

お茶の水女子大学附属図書館では、全学的な教育改革の動きに連動し、2007年4月に図書館内に新しく学生のための学習空間である「ラーニング・コモنز」を設置した。本学にとって、ラーニング・コモنزは、「21世紀型文理融合リベラルアーツ教育」を象徴する場であり、学内の各部署が連携して運用すべき協働の場でもある。小規模な大学図書館が小規模だからこそその利点を生かし、図書館が主体となった協働の場を推進するには、1. 図書館がやる気があることを学内にアピールすること、2. できることからとにかく着手すること、3. 学生を運用に巻き込むことがポイントである。

キーワード：ラーニング・コモنز、キャリアカフェ、学習空間の創設、教育改革と大学図書館、リベラルアーツ教育

1. はじめに

昨今、大学図書館の果たすべき機能として、学習・教育支援、とりわけ教育プログラムとの連動が重視されている。文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」では、明治大学の「教育の場としての図書館の積極的活用」¹⁾が、また、「新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援GP）」では東京女子大学の「マイライフ・マイライブラリー：学生の社会的成長を支援する滞在型図書館プログラム」²⁾が採択されているように、大学全体の教育プログラムと連動した図書館の活動が注目を集めている。

2007年3月の筑波大学大学院図書館情報メディア研究科による『今後の「大学像」の在り方に関する調査研究（図書館）報告書—教育と情報の基盤としての図書館』においても、教育基盤としての大学図書館として、1) 学習と図書館の資料の関係、2) 場としての図書館、3) 情報リテラシー教育支援の3つの視点が指摘されており³⁾、このうち、「場としての図書館」は本稿で取り上げるラーニング・コモنزに直結した視点である。

私が所属するお茶の水女子大学附属図書館は、総床面積4,542m²の2階建てで（この規模は国立大学平均の42%にあたる）、図書館職員数や予算規模も国立大学平均の半分にも満たない小規模な大学図書館である。本稿では、このような小規模な大学図書館が、大学全体の教育プログラムと連動した図書館改革の中で「ラーニング・コモنز」「キャリアカフェ」という施設面での改革をなぜ実施する必要があったのか、実施にあたってどのような工夫を凝らしているのか等の事例報告を中心に、学生にとって魅力ある学習空間を図書館が主体となって創成する可能性についてまと

めてみたい。

2. ラーニング・コモنزとは

「ラーニング・コモنز」については、米澤誠氏がカレントアウェアネスのNo.289（2006年9月20日）に「インフォメーション・コモنزからラーニング・コモنزへ」⁴⁾で解説された記事や、井上真琴氏がミネルヴァ通信 2007年6月号と8月号に「学習と知の創造空間—ラーニング・コモنز」⁵⁾で連載した記事に詳しい。簡単にいえば、学習の場としての大学図書館を象徴する施設モデルであり、電子ジャーナルに代表される電子的な学術情報資源の普及により起こった「図書館不要論」や入館者数の減少という大学図書館の危機に対する図書館側からの解決提言とも言える。

コモنز（commons）とは「共有」あるいは「公共の場」を意味するが、パブリック（public）という言葉に比較して、単なる共通の場というよりは「誰のものでもない」「垣根のない」という意味合いが強いように思われる。このことは後述する米国大学図書館でのラーニング・コモنز、あるいはインフォメーション・コモنزが、学生が学習のために集う共有の場であるとともに、学生サポートを受け持つ大学内の様々な部署が「垣根を越えて」運用サポートを行う場として機能していることにも表れているように思う。

3. 米国大学でのラーニング・コモنز

私は、2007年3月に本学の「事務職員海外研修プログラム」により米国東部のいくつかの大学図書館のラーニング・コモنزやインフォメーション・コモنزを見学する機会を得た。2大学の事例を簡単に紹介する。

3.1 マサチューセッツ大学アマースト校（UMass Amherst）
<http://www.umass.edu/learningcommons/>
マサチューセッツ大学アマースト校は、19,900名の学部学生、5,700名の大学院生、1,170名の教員が在籍する大規

*もでき りこ 国立大学法人お茶の水女子大学図書・情報チーム

〒112-8610 東京都文京区大塚 2-1-1

Tel. 03-5978-5833

（原稿受領 2008.4.21）

模な州立大学である。メインライブラリーである De Bois 図書館のラーニング・コモンズは、日本の大学図書館からも多くの職員が見学を訪れており、ラーニング・コモンズを語る上で欠かせない存在である。

実際に訪れてみると、地下とは思えない明るい空間に、200 台を超えるパソコンが置かれており、1 台の PC を数名で共有できる大型のテーブルや、ガラスで区切られたグループ学習室が 16 あり、ラーニング・コモンズは常時、学生たちでにぎわっている。また、このスペースには、パソコン用の椅子のほか、ソファやスツールなどが数多く置かれ、好みと用途で使い分けられるようにバリエーションを持たせている。

そのほか、ライティングセンターやキャリアセンターなど図書館以外の学生支援部署のデスクが置かれているのも、ラーニング・コモンズの特徴の 1 つである。1 年間で全学の学生のうち 70% はラーニング・コモンズを利用したという実績が物をいい、他の学生支援部署からもラーニング・コモンズにデスクを置きたいという要求が次々とあるそうである。図書館に「コモンズ的」なスペースを置くことにより、直接的な学生サービス向上に加えて、運用体制の

変革にも影響していることは興味深い。

また、ラーニング・コモンズのような活発なコミュニケーションを促進する場の提供とともに、図書館 2 階には「Quiet Study Space」が置かれ、静かに勉強する場も確保されている。

3.2 マウント・ホリヨーク大学 (Mount Holyoke College)

<http://www.mtholyoke.edu/lits/>

マウント・ホリヨーク大学は、1837 年に米国初の女子大学として設立された 170 年の歴史を誇る伝統ある大学である。大学院を持たないリベラルアーツカレッジであり、2,100 名の学部学生が在籍している。教員数は 210 名で、教員 1 人当たりの学生数が 10 名という徹底した少人数教育が特徴である。なお、学部学生数と教員数のみを取り上げるとお茶の水女子大学とマウント・ホリヨーク大学はほぼ同規模である。

De Bois 図書館が地上 25 階、地下 1 階の高層ビルであることに比べ、マウント・ホリヨーク大学の図書館は、大学の伝統を反映した大変にクラシックな建物であり、ネットワークケーブルを 1 本引くにあたっても苦心のあとが見える図書館である。この図書館に隣接する（内部で複雑につながっている）建物の一部を改装し、インフォメーション・コモンズが設置されている。備えられている機器などは規模の違いはあれ、De Bois 図書館に共通するが、特筆すべきは、インフォメーション・コモンズを運営していくために、図書館や IT 部門やアーカイブズ部門などのスタッフを混在した「Library, Information and Technology Service (LITS)」という組織を作ったことであろう。コモンズの名にふさわしい「垣根を越えた」運用体制を実現している。私が訪れた 2007 年 3 月も各部署の専門のスタッフがアイディアを出し合い、今後の施設改善プランニングを検討されている最中で、まだ秘密だという設計図も見せていただいた。設計図の内容もさることながら、お会いしたスタッフ全員が生き活きと楽しそうに計画をお話されていた姿が印象的であった。もともと、2007 年 3 月時点で LITS の設置からは 5 年が過ぎていたが、関係者の言葉によれば「当初はいろいろな齟齬があったが、やっと落ち着いてきて、成果が現れてきたところである」とのことであった。日本の大学でも図書館と情報系組織の統合がかなり行われたが、初めからすなりと全てが上手くいくわけではないというのは、日米を問わず同様の悩みであるようである。

そのほか、私が見学時に特に注目したのは、パソコンなどの ICT 機器を設置するには必ずしも条件に恵まれていない古い建物の構造を克服しているアイディアである。例えば、柱の周りにパソコン用の机など、与えられた条件の下で知恵をしばり実現させていることに変な勇気づけられた。

柱を利用したパソコン机は、本学のラーニング・コモンズでもさっそく実現し、施設面積の有効活用を図っている。



写真 1 学生で賑わう De Bois 図書館のラーニング・コモンズ



写真 2 ラーニング・コモンズ内に置かれているキャリアサービスデスク



写真3 マウント・ホリヨーク大学図書館の内部

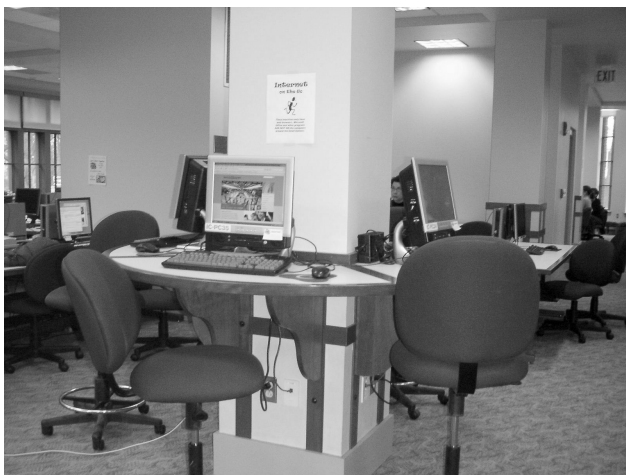


写真4 インフォメーション・コモンズ内の柱を利用したパソコンデスク

4. お茶の水女子大学のラーニング・コモンズ

本学図書館のラーニング・コモンズの状況について簡単に紹介する。

本学のラーニング・コモンズは、2007年4月に図書館1階の南側の約150m²の場所を利用し、設置した。この場所は採光を配慮した、館内でももっとも開放的で明るいスペースで、外からも見えやすいという利点を持つ。

このスペースに、2008年4月現在で、学生用パソコンが66台、貸与パソコンなど持ち込み用のパソコンが使えるデスクが8台分（認証ネットワークのポートが利用可能）、スキャナー・コピー機能付のネットワークプリンター1台が置かれているほか、図書館1階全体では無線LANが利用できる。これらのICT機器の設置に加えて、情報基盤センターと図書館との協力により、パソコンのマニュアル本やシステム関係の本、アカデミックライティングやプレゼンテーションに関する本などをラーニング・コモンズ内に置き、学生に自由に利用してもらっている。

ラーニング・コモンズでは、学生が自由にパソコンを使ってレポートなどを書くほか、図書館の論文検索講習会や授

業、セミナーなどの会場としても活用されている。

学生用のパソコンは、iMacが中心で個々のパソコンの内蔵ハードディスクを使わないシンクライアント方式で管理している。ログインは、非接触ICのFeliCaを内蔵した学生証による認証システムで運用している。これらのシステムおよびパソコンの管理部署は情報基盤センター（2008年4月に総合情報処理センターから改称）ではあるが、学生から見れば、どこが管理部署であるかということはさして重要ではなく、使いやすい機器が使いやすい場所にあることが重要だと考え、学生に対しては、これは図書館の管理のもの、これは情報基盤センターの管理のものというような区別をつけないように心がけている。

人的なサポート面では、大学院生にラーニング・アドバイザーとして図書館の開館時間中は常駐してもらっている。彼女たちは、パソコンの使い方のみならず、上級生として、後輩たちに学習上の様々な助言を与えることができる能力と経験を有している。質問する学生たちにとっても、教員や職員に質問するには敷居が高くても、ちょっと年上のお姉さんに聞くことができるのは気持ちの上で楽なことであろうし、また、アドバイザーを務める大学院生にとっても、サポートする側を経験することは、キャリア教育支援の意味からも重要なことであり、大学院生にこのような形でラーニング・コモンズの運用に加わってもらうことは、大変有意義なことであると考えている。今後の課題としては、ラーニング・アドバイザーと図書館のレファレンスカウンターの連携である。残念ながら、現時点ではこのことについては、未着手である。

ラーニング・コモンズの利用状況であるが、設置直後の2007年4月から5月にかけて実施した利用状況の定時観測（毎日10時と15時に何人が利用しているかを計測した）によると、平均して92%のパソコンが利用されていた。

また、2006年と2007年の図書館への入館者数を比較すると、約40%の増であり、2008年4月平日の平均入館者数は1,450名を超えている。本学の学生数約3,200名（学部学生2,100名、大学院生1,100名）から考えるとこの数字はかなり高い数字であると言えるだろう。これらの数字は当初想定していたものより相当高い数字であったが、このことを大学内の役員会等で報告することで、学生が図書館に集まっている実態をアピールすることができた。

またこのようなアピールが学内でさらに効果を生み、2007年度末には、教育担当の理事から、ラーニング・コモンズに学生用のパソコンを増設する相談が持ち込まれ、結果として、図書館の負担なくさらに設備を整えることが実現した。

5. お茶の水女子大学の教育戦略と附属図書館改革の連動

お茶の水女子大学では、現在、全学的に「21世紀型文理融合リベラルアーツ教育」に取り組んでおり、2007年度からスタートした新入生全員へのノートパソコン貸与もこの教育改革の一環である。ノートパソコン貸与については、



写真5 お茶の水女子大学ラーニング・コモンズ



写真6 ラーニング・コモンズで実施された院生向けのセミナー

附属図書館のホームページでも報告しているが⁶⁾、このパソコン貸与プログラムが目指すものは、

- 1) 貸与用に準備したノートパソコンには、あえてワープロや表計算ソフト等のアプリケーションソフトを入れず、学生が自分で必要なソフトを自分でインストールし、自分なりのパソコン環境を構築し、学習に役立てられる技能を習得すること
- 2) パソコン管理者として自覚を持って管理できる技術と知識を習得すること
- 3) ネットワーク利用に関して、セキュリティに関する知識を習得し、社会的責任を自覚すること

等であり、単にパソコンを貸与して学生生活を支援しようというのではなく、大学全体で実施している教育プログラムの1つである。このプログラムの開始に併せて、「貸与パソコン相談室」を設置し、専任の教員がきめ細かい講習会を随時実施するなど、学生の教育、支援にあたっている。

このパソコン貸与プログラムとラーニング・コモンズの設置は、同時並行的に進められたが、大学が、学生に対してパソコンという「ツール」とコモンズという「場所」を同時に提供する、いわば裏表の関係にあり、両者ともに図書館が主体的に関わっていることが重要である。

図書館が「学習の場」「教育の場」であることは、大学図書館職員にとっては当たり前すぎる事実であり、あえて、このことを大学に対して、とりわけ大学の経営陣に訴えることはしてこなかったのではないと思う。

しかし、一方、学内の教員と話す中で気づかされることは、図書館は資料のある場所としては認識されているが「教育の場」としての認識はあまりされていない、という事実である。特に本学の場合は、個々の研究室、教員が個別に資料を購入し、個々の蔵書を構築してきたという長い歴史があり、研究室の図書室のように資料がある場所でのゼミを行うことは当然のこととしても、附属図書館がそういう場になりえるとの認識はないようである。

かつて(あるいは現在も)大学図書館を象徴するものは、目録のカードボックスであった。本学の図書館でも、2007年11月までは、図書館1階の正面玄関を入った真正面にカードボックスがずらっと置かれていて、この量は、1階床面積の実に5%を占めていた。現在は、カードボックスそのものの量を減らし、別の場所に移動させたが、図書館に入ってまず目にするものがカードボックスであるという事実が、利用者とりわけ教員の図書館に対する意識を形成していたのではないかと想像する。カードボックスがいわば「知の積み重ね」を示すものであるとするなら、ラーニング・コモンズやキャリアカフェが象徴するものは「コミュニケーションから創造される知」であり、答えがないものを考える力を育む場でもある。

本学が2008年度から稼働させた「21世紀型文理融合リベラルアーツ教育」⁸⁾が目指すものは、文系理系の垣根を越え、講義・討論・発表・実験実習・演習を組み合わせた授業構成により、「読み・聞き・書き・語り・作る」という5つの能力の養成を通して、ひとりひとりが生涯にわたって生き活きと生きていくための英知を身につけることにあり、まさに「コミュニケーションから創造される知」を目指すものである。

したがって、大学として、教育改革を進める上でラーニング・コモンズ的な場やキャリアカフェ的な場を学内に置くことは必然であり、その場所として附属図書館が選ばれたことは、それに至るまでの図書館からの積極的なアピールが功を奏したと言える。

6. ラーニング・コモンズは出発点

本学の図書館は小さい。増改築の見込みがない中で、ただでさえスペースのない図書館にあえてラーニング・コモンズやカフェを作らなくても良いのでは?という疑問も当然のことであろう。

しかし、私たちは小規模でスペースがない図書館だからこそ、「コミュニケーションの場」としての図書館を打ち出す必要があると考えた。それは、前述したとおり、大学全体で教育改革に取り組んでいる中であって、大学図書館が何も責任を果たさなくていいということはありません。この絶好のタイミングを逃がす手はないと考えたからである。ラーニング・コモンズやカフェの設置は、現

状の図書館施設機能に付加して何かあらたな事業を起こすことであり、これを図書館単独で行うのは、小規模な図書館では不可能と思うのも無理ないことではある。しかし、本学の場合は、大学全体の教育改革に寄与するという目的のもと、いち早く手をあげた図書館に対して学内のあちこちから有形・無形のサポートが寄せられ、結果として短期間のうちに多くのことを同時に実現することができた。この短期間での展開は、図書館だけではなく、お茶の水女子大学にとっても幸運なことであったと言える。

図書館では、大学全体の教育改革の動きと前後し、2006年の春から秋にかけて「リベラルアーツ支援図書館」をキーワードとした附属図書館の将来像の検討を行っていた。この検討では、わかりやすい、つまり外から見えやすい改革案として図書館のフロアプランの策定をまず行った。ラーニング・コモنزの設置はその中心的計画であった。

以下は、2006年4月時点の図書館1階の平面図と2008年4月現在の平面図である。増改築なく、内部のごく一部の改修のみで、ラーニング・コモنزを作った様子をみていただきたい。

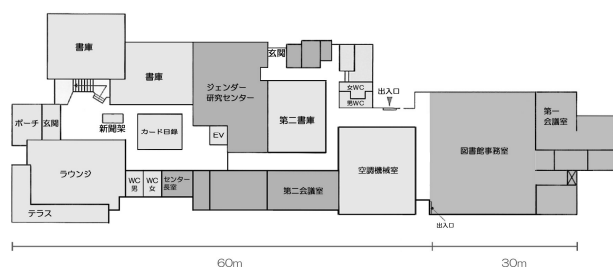


図1 2006年4月の図書館1階

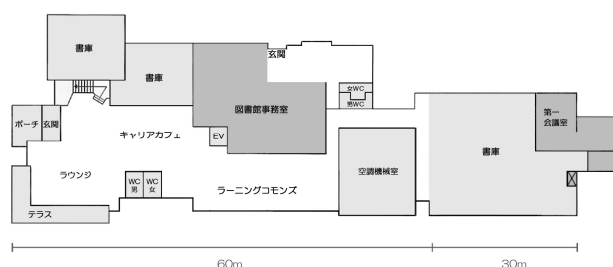


図2 2008年4月の図書館1階

ラーニング・コモنزの設置をスタートとし、お茶の水女子大学の図書館では、1階と2階で階層を分けた機能分化（ゾーニング）を進めている。1階にはラーニング・コモنزのほかに、ラウンジ(新聞と一般雑誌を置いている)、キャリアカフェ(現代GPプログラム、情報基盤センター、附属図書館の協働で設置した学内カフェ)⁷⁾があり、ラウンジとキャリアカフェでは、キャリアカフェで設置したカップ式ドリンクサーバーで購入した飲み物、ペットボトル飲料を飲むことができる。1階は、コミュニケーションの場なので、会話も可能であり、キャリアカフェでは学生の企画による講演会なども実施されている。

1階のもう1つの特徴は、図書館の事務室をラーニング・コモنزとガラス窓で隣接した位置に置き、職員が学生に速やかに対応できるようにした点や、目録業務をはじめとした図書館の基盤的業務を学生の目に触れるようにした点である。

そのほか、図書館へ入る敷居を低くすることを目的に、入り口付近の注意書きに相当するような張り紙は極力減らし、玄関周りを明るくすっきりさせる等の工夫を行っている。

一方、2階は図書館カウンター、開架図書、書庫を持ち、静かに勉強する場として機能する。このちがいを明確にするために、2階にある学習スペースを「一般閲覧室」から「クワイエット・スタディスペース」と改めた。また、大学院教育の外部評価で、大学院生用の学習スペースが少ないとの指摘があったことを受け、大学院研究科と情報基盤センターとの協働により、図書館2階のいちばん奥まった静謐な場所にパソコンを配備した大学院生用の研究スペースも設置した。

改修工事の実施とともに、サービスの姿勢を積極的に打ち出すことを方針とした細かい改善にも取り組んでいる。全体を通して1階にはゲートチェックを設けなかった代りに、建物の奥に入るにしたがって利用条件を厳しくするという、ホテルなどのサービス機関で見られる施設利用の手法を参考にした。

また、ラーニング・コモنزおよびキャリアカフェの設置により、全館の座席数も増やすことができたことも成果の1つである。2008年4月現在、全館の座席数は約400席であり、2007年3月時点と比較し、20%の増加である。座席数を全学生数で割ると0.12であり(学生8人に1脚の椅子がある計算)、文部科学省研究振興局情報課がまとめた「平成17年度学術情報基盤実態調査結果報告」⁹⁾によると国立大学平均が0.11であるが、本学図書館の総床面積が国立大学平均の42%であることから考えると、健闘している数字と言えよう。

なお、学術情報基盤実態調査では、図書館のサービススペースの内訳は「閲覧スペース」「視聴覚スペース」「情報端末スペース」「その他」のみであり、「ラーニング・コモنز的」スペースのことは、まだ考慮されていないようである。しかしながら、単純に本学のラーニング・コモنزを「情報端末スペース」として、キャリアカフェを「その他」として面積をカウントするのは抵抗があり、このような調査においても、学習コミュニケーションのスペースをきちんと把握できるような項目設定を期待したい。

7. ラーニング・コモنزは大学職員としての協働の場

ラーニング・コモنزとは、箱物の問題ではなく、どう運用するかがもっとも重要である。ラーニング・コモنز的な場所の運営には学内各部署の協働が必須である。場をつくることによって、必然的に協働が起こるとも言える。様々な協働により、別なことだと考えられていたものの境がな

くなり、そこから新しい何かが生み出されることが連携事業の成果であろう。また、こうした協働の場で、図書館職員の意識としてなによりも大事なことは、専門職として何ができるかということに加えて、「われわれも大学の運営に責任がある」という大学職員としての当事者意識である。

組織レベルの統合では、これまで多くの大学で情報系センターと図書館の統合が進められているが、組織として一緒になっただけでいいというものではないようである。お茶の水女子大学では、情報基盤センターと附属図書館は別組織でありつつ、一緒に仕事をするという運用を行っている。これが可能である背景には、小規模大学であるゆえに各々のスタッフの顔も力量も得意分野もお互いが熟知し、理解し、尊重し合えているという点が大きい。

8. まとめ

最後に、ラーニング・コモンズの設置にあたって、私たちがもっとも意識し、工夫したことを3点述べ、まとめに代えたい。

①図書館がやる気があることを学内にアピールする

改修工事のような外から見える改革と邇及入力のような外からは見えにくい改革を同時に進める。見える改革は学内に図書館の存在をアピールするのに効果があり、見えない改革は図書館の底力をアピールするのに効果がある。

②できることからとにかく着手する

動くことで問題点が明確になり、それらの問題を順次解消することで、次なるステップが見えてくる。

③学生を運用に巻き込む

人手不足の解消という現実的な問題もさることながら、サポートする側になって気がつくことがあるなど学生自身

のキャリア意識育成に役立つ。本学では、前述の大学院生のラーニング・アドバイザー以外にも、図書館で学生アシスタントの活用「LiSA (Library Student Assistant) プログラム」を2007年11月から実施している。

以上のように、大学の動き、特に教育改革の取り組みと連動することで、本学のような小規模な図書館でも、様々な改善を進めることができた。図書館が主体となって、学生にとって魅力ある学習空間を創成する可能性は十分にあると私たちは実感している。

参 考 文 献

- 1) 明治大学図書館. 平成19年度「特色ある大学教育支援プログラム」(特色GP)
<http://www.lib.meiji.ac.jp/openlib/course/gp.html> [accessed 2008-04-08].
- 2) 東京女子大学. マイライフ・マイライブラリー
<http://office.twcu.ac.jp/o-board/official/news0906.html> [accessed 2008-04-08].
- 3) 今後の「大学像」の在り方に関する調査研究(図書館)報告書—教育と情報の基盤としての図書館. 国立大学法人筑波大学. 2007, 5p.
- 4) 米澤誠. インフォメーション・コモンズからラーニング・コモンズへ. カレントアウェアネス. 2006, no.289, p.9-12.
- 5) 井上真琴. 学習と知の創造空間—ラーニング・コモンズ. ミネルヴァ通信. 2007, 6月号, 8月号
- 6) お茶の水女子大学. 学部1年生にノートパソコンを貸与
http://www.lib.ocha.ac.jp/topics/pc_taiyo.html [accessed 2008-04-08].
- 7) お茶の水女子大学. 現代的教育ニーズ取組支援プログラム
<http://sec.cf.ocha.ac.jp/cagp/> [accessed 2008-04-08].
- 8) お茶の水女子大学. 21世紀型文理融合リベラル・アーツ
<http://www.ocha.ac.jp/la/> [accessed 2008-04-08].
- 9) 平成17年度学術情報基盤実態調査結果報告. 文部科学省研究振興局情報課. 2006.

Special feature: Rethinking reference services. Introducing Ochanomizu University Learning Commons: A report on installing a Learning Commons in a small-scale university library. Riko MODEKI (Ochanomizu University Library and Information Team, 2-1-1 Otsuka, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8610 JAPAN).

Abstract: Ochanomizu University Learning Commons was set up in April, 2007 to provide an interactive study space for students. The Learning Commons symbolizes one of the University's recent educational reform plans: "A New Approach to Advanced Liberal Arts Education in the 21st Century." It serves as a collaboration base for the library and other student-affairs offices. This article describes how Ochanomizu, a small-scale University library, has played a leadership role in the collaboration of on-campus student services, focusing on three points: (1) emphasize the library's strong engagement in student affairs to other staff; (2) start from small projects; and (3) encourage as well as support student participation in the reform.

Keywords: Learning Commons / career education / student services / study space / university libraries / educational reform / liberal arts / collaboration